

学校教育目標	夢と志をもち 果敢に挑戦し 自己実現する児童生徒の育成	経営理念	【ミッション】「地域とともに未来を創る 一学校での学びを地域社会に結びつける」 【ビジョン】○課題に主体的に向き合い、解決に向けた行動をとることのできる人材の育成。 ○変化の大きい世界の中で状況を把握し、目標を持ち、他者と協力して課題解決に取り組むことのできる人材の育成。
--------	-----------------------------	------	--

評価計画					自己評価				改善方策		学校関係者評価				
目 項	点 重	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目	目 標 値	達成値		達成度 (2月)	評価 (2月)	結果と課題の分析 (2月)	改善方策 (2月)	評価 (2月)	コメント (2月)	
							10月	2月							
確かな学力 (学習活動)	1	学びに向かう姿勢を整え、育てたい資質・能力「推論する力」の育成を図る。 (重点) ・小中一貫教育による学びの充実 ・地域貢献・地域活性化プロジェクト	eSTEAM教育を推進し、児童生徒の「推論する力」を各教科で育成する。	・算数・数学、生活科、理科を中核とし、「推論する力」を育成する授業づくりを小中合同で開発する。 ・地域をフィールドとし、推論する力を発揮できるカリキュラムを開発する。	・単元テストにおいて目標達成到達率を上回る児童を80%以上にする。	80%	(小) 78.0%	(小) 86.3%	107.8%	4	・高学年を中心に、計画的に乗り入れ授業を実施することができた。また、小中の教職員が相互に児童の理解度・意欲、つまずきなどを多面的に把握し、授業改善に生かし、目標を達成することができた。	・各教科で「乗り入れ授業で育てたい力」を明確化し、月1回の短時間ミーティングで、乗り入れ授業の成果と課題を共有する時間を確保する。	A A12 B1 C1	・テスト等で成果が表れている	
					・小中一貫、接続教育を推進し、児童生徒が安心して学習できる学習環境を整える。	・半期に1回は、小中の授業をお互いの教員が見て回る。	100%	33.0%	80.0%	80.0%	2	・小学校では、教科ごとの課題や指導の方向性を共有し、授業づくりや指導方法について意見交換を行った。学級を開けることが難しく、中学校の授業を参観できない教職員もいた。 ・中学校では、児童が中学校への進学時にスムーズに中学校生活へ移行できるようにするために児童の実態や小中の教科の接続を把握することを目的として授業参観を行った。その際の気づきを交流する場を設け、来年度に向けて授業の進め方を考えることができた。	・小学校では、教職員が授業参観しやすい環境を整えるために、事前の調整やサポート体制を整える。 ・中学校では、9年間を見通した資質・能力の育成につながる授業改善となるよう、参観の目的を明確化し気づきをもとにした研修を行う。	B A2 B9 C3	・交流の目的を明確にして実施するとよい。 ・小学校の様子を見ると、担任が教室を離れることが難しい様子が窺える。 ・参観しやすい環境整備を整えてほしい。
					・板書のルールを小中でそろえる。	・板書のルールを小中でそろえる。	100%	86.7%	100.0%	100.0%	4	・小学校では、児童が見通しのもてる学習環境づくりを行い、「めあて」「問題」「まとめ」の掲示資料を全学級で揃え、思考の流れが分かる板書になるようにした。 ・中学校では、小学校からのスムーズな接続となるように、全教職員が板書のルールをそろえて授業を行うことを意識することができた。	・小学校では、安心して学習できる環境をつくるために、よい板書例を持ち寄ってモデルを作成するなど、全教員で共有し、児童にも周知したりする。 ・中学校では、生徒の思考の足場となる板書にするため、「めあて」と「まとめ」の質的向上や「構造的な」板書の在り方を目指した研修を行う。	A A13 B1	・思考の可視化と円滑な小中接続に向けた基盤が確立されている。 ・進学時に学習にスムーズには入れている。
					・推論する力に関する検証問題を実施し、各学年の昨年度の正答率を上回る。	・推論する力に関する検証問題を実施し、各学年の昨年度の正答率を上回る。	80%	72.2%	(小) 95.4% (中) 81.4%	(小) 119.3% (中) 101.8%	4	・小学校(第4・5・6学年)では、育成された推論する力が発揮することができるかを見る独自問題の正答率が演繹的推論:95%、帰納的推論:96%であった。 ・中学校(全学年)では、育成された推論する力が発揮することができるかを見る独自問題の正答率が演繹的推論:89%、帰納的推論:73%であった。	・小学校では、これまでの研究で積み上げた教科以外の推論する力の育成について研究を深める必要がある。 ・中学校では、データや資料を扱う際、共通していえることや関係性をしっかり表現させる授業改善が必要である。また、表現したその共通性や関係性をクリティカルに見る視点を育成する必要がある。	B A8 B5 N1	・推論スキルの向上が見られる。 ・取組の成果を子供の姿として見とれている。 ・批判的視点の育成も期待したい。
					・各教科で志和中小中学校版eSTEAM教育を意識したカリキュラムを開発し、実践する。	・各教科で志和中小中学校版eSTEAM教育を意識したカリキュラムを開発し、実践する。	100%	80.0%	86.4%	86.4%	2	・小学校では、年間で国語科(1)、社会科(4)、算数科(4)、理科(4)、生活科(4)、総合的な学習の時間(4)、生活単元学習(1)において、志和中小中学校版のeSTEAM教育の実践を試行錯誤した。しかし、発達段階による難しさから課題解決するに苦労していることがある。 ・中学校では、年間で国語科(1)、社会科(1)、数学科(4)、理科(5)、音楽科(3)、保健体育科(4)、英語(2)、総合的な学習の時間(3)、自立活動(1)において、志和中小中学校版のeSTEAM教育の実践した。一方で、教科の特質上、本校が設定したeSTEAM教育の視点で課題解決することに難しさを感じているものもある。	・小学校では、発達段階に応じた志和中小中学校版のeSTEAM教育の教科横断的な学びになるようにカリキュラム開発を継続して行う。 ・中学校では、いろいろな教科でeSTEAM教育を実践できるようにするために、eSTEAM教育の実践事例等を共有を図る。	B A2 B10 C2	・実践を踏まえた改善を続けてほしい。 ・教科特性や発達段階に応じた課題解決手法に難しさが残る。事例共有による質的向上が求められる。 ・研究会に参加し、先進的、実験的な取組が行われていることが実感できた。
					・ICT活用の推進を図り、児童生徒の学習意欲と興味・関心を高める。	・各教科の特性に応じて、効果的にICTを利活用する。	90%	91.1%	児童生徒 92.2% 教職員 81.0%	児童生徒 102.4% 教職員 90.0%	4	・小学校における肯定的な回答は教職員91.6%、児童96.8%であった。教職員間でICT活用スキルに差があるため、その差を埋めていく必要がある。 ・中学校における肯定的な回答は教職員66.6%、生徒86.0%であった。調べ活動やドリルなどの反復学習、レポート作成などで活用することにより、他者意識が高まったことが考えられる。また、係活動や委員会活動の見直し、評価をすることに子どもたちがより実感を味わえたと考えられる。 ・中学校における肯定的な回答は90.2%であった。行事や生徒会活動、学級運営等において生徒が主体的に取り組む、教師が適時に評価する取組の成果が表れている。また、Iheekiにおける生徒の精神的な成長も全学年上昇している。	・小学校では、誰もがICTを活用できるスキルとするために校内研修を行い、ICTが得意な教員の実践を共有する。また、情報モラル・デジタルリテラシーの体系的な指導も合わせて行う。 ・中学校では、各教科の特性に応じたICTの利活用ができるよう、今後もICT支援員の協力を得た研修を行う。	A A8 B5 C1	・教科特性に応じた支援を受けてほしい。 ・時代の要請にこたえつつ、児童生徒が自ら考える力もバランスよくつけてほしい。 ・ICT機器の利便性を生かしながら、様々な弊害から子供たちを守る指導もお願いしたい。 ・ネットモラルについて、保護者との連携を行いながら指導してほしい。 ・ICTもAIも積極的に経験させてほしい。
豊かな心(生徒健指や導)な体	2	自立・自律し、自他のことを大切にし、自己の健康と体力について理解して、高めていこうとする児童生徒を育成する。 (重点) ・SSR、通級指導教室の効果的運用 ・部活動の地域展開 ・小中合同スポーツ大会等の異年齢交流行事	・児童生徒の主体性と自発性を育てるために、児童会や生徒会活動をはじめとした活動を充実させる。 ・児童生徒の自己肯定感を高めるために、スモールステップで成功体験を積み重ねさせるとともに、適切に評価する。	・児童生徒の自己有用感を高め、アイデンティティの確立を図る。	85%	95.2%	92.1%	108.4%	4	・小学校における肯定的な回答は93.2%だった。どの学年においても地域の方々にお世話になりながら学習を進める機会を設けたことにより、他者意識が高まったことが考えられる。また、係活動や委員会活動の見直し、評価をすることに子どもたちがより実感を味わえたと考えられる。 ・中学校における肯定的な回答は90.2%だった。行事や生徒会活動、学級運営等において生徒が主体的に取り組む、教師が適時に評価する取組の成果が表れている。また、Iheekiにおける生徒の精神的な成長も全学年上昇している。	・引き続き児童生徒主体の活動を促し、適切なタイミングで評価を行うことで自己有用感を高める取り組みを行う。 ・小中の交流や連携を密にし、9年間の見直しを持ち、指導を行う。	A A12 B2	・自己有用感をもってしていることは社会においても大切なことであると考えられるため、90%以上の児童生徒が肯定的に回答していることは素晴らしいと思う。 ・地域連携を通じた他者意識の向上や適時の評価による動機づけが有効に機能している。		
				・児童生徒が自らの健やかな体作りに取り組めるようにするために、児童生徒がリズムチェック週間における自己の生活を振り返り、改善のための目標を立てる時間を設ける。	・リズムチェック週間の振り返りにおいて、「目標を達成することができた」と回答する児童生徒の割合を80%以上にする。	80%	87.0%	87.3%	108.8%	4	・小学校における肯定的な回答は93.1%だった。生活リズムチェック週間の前に、重点項目の意図や具体的な取組を示したり、保護者啓発を行ったことにより、保護者が児童の生活を支える意識が高まったと思われる。 ・中学校における肯定的な回答は76.0%だった。下半期は各生徒が自身の課題に即した具体的な目標設定を行えるよう促した。数値上の達成率は前回は下回ったが、生徒一人ひとりが主体的に課題に向き合うことで、質的な向上ができた。	・引き続き、目標設定のレベルに注目させ、意味のある取り組みを実施する。	A A12 B1 C1	・自分の生活や健康を振り返って生活リズムを整えたり意識したりすることが身に付く良い取組である。 ・継続的に個別目標設定の指導を行ってほしい。 ・自分の子どもリズムチェック週間の時は目標を達成しよう頑張っているの、良い取組をもらっていると感じている。	
				・安全で安心できる学習環境を整える。 *SSR生城山(おおぎやま)ルーム(小中)の充実(不登校児童生徒への対応)	・不登校の未然防止のため、学級における積極的な生徒指導を行う。 ・児童生徒理解を深めるために、スクールカウンセラーや心のサポーター等と連携するとともに、SSRを適切に運営する。	85%	92.3%	98.8%	116.2%	4	・小学校における肯定的な回答は98.8%であった。一斉下校時や各担任から週末や週初めに振り返りを行うことで意識を維持することができたことが考えられる。また、SSRの活用やSC及びSWと連携しつつ、個別に落ち着いた環境を整えることができた。 ・中学校における肯定的な回答は98.9%であった。上半期に引き続き、教職員やSC、心のサポーター、外部機関等と連携を行い、安全・安心な環境を作れるよう取り組んだ。生城山ルームで過ごしていた生徒は、自ら教室に復帰した。	・引き続き、生徒の様子を細かく見守る。	A A13 B1	・SSRの活用や専門職との連携が実効性をもって機能している。 ・整えられた環境に身を置くことで安心して学級に居られることは嬉しいことである。 ・不登校の児童生徒の居場所づくりを引き続き行ってほしい。	
信頼される学校	3	地域とともにある学校として、信頼される学校づくりを推進する。 ・コミュニティ・スクールの運営体制の充実	・コミュニティ・スクールの体制をもとに、地域連携を推進する。	・コミュニティ・スクール推進員と地域学校協働推進員、管理職との連携を毎月1回行う。	100%	100.0%	100.0%	100.0%	4	・コミュニティ・スクール推進員と管理職との連携を毎日行った。 ・総合的な学習の時間等に、地域の方にゲストティーチャーとして来ていただいたことで、教職員は学習の在り方・進め方に新たな視点をもつことができた。ゲストティーチャーとのやり取りを通して児童生徒の思考が深まったこと。 ・「地域人材や施設を積極的に活用し、OSとしての特徴を出している。」に対する肯定的な回答をした保護者は88.9%(前期比+7.4%)である。	・児童生徒の資質・能力の向上を図るために、地域との効果的な連携ができるよう、活動の時期や内容について整理したものを作成中である。	A A10 B3 N1	・地域住民の参画が教育効果の向上に直結している理想的な体制である。 ・部活動の地域展開に向けて学校・自治体・地域が一体となって考えてほしい。 ・子どもが自由に過ごせる場所や空間を地域で作ることも考えたい。		
			・学校HPや学校だより等による情報発信を定期的に行う。	・学校の取組や児童生徒の活動の様子を広く発信する。	100%	100.0%	100.0%	100.0%	4	・毎月発行の学校だよりや学級通信、HP更新などを活用して、随時情報発信している。 ・各行事や活動の目的(ねらい)や児童生徒の取組の様子や感想を伝えるようにしている。	・保護者に対する啓発的な内容も掲載できるようにする。	A A12 B1 C1	・定期発行が着実に実行されており、行事等の目的が伝わっている。 ・保護者に対する啓発的な内容の追加という改善策も前向きで適切である。 ・いつも楽しみにしている。 ・委員には情報公開をしてほしい。		
働き方改革	4	業務改善を推進、超過勤務時間の月平均45時間以内を目指す。	・教職員の心身の状況を積極的に把握する。 ・児童生徒の学びや活動を充実させるために、目的を意識した指導を行うとともに、地域の協力ネットワークを活用する。	・学校衛生委員会において、入退校記録等に基づいた分析や教職員の心身の状況把握を行うとともに、改善に向けた検討を毎月1回行う。	100%	100.0%	100.0%	100.0%	4	・小中合同企画委員会を毎月1回実施し、行事や教室・体育館使用等のすり合わせを行った。 ・PTAや地域の方の協力を得て教育研究会を行い、これまでの研究成果を発表して参加者から好評を得た。 ・「働きやすさ」と「働きがい」の両立を目指して、衛生委員会を毎月実施し、教職員の心身の状況を把握し、分担の調整や協力できる雰囲気醸成を図った。 ・超過勤務時間の4~1月期の月平均は小36:18(昨年40:23)、中35:53(昨年44:44)であった。	・来年度の計画を作成するために、小中合同行事や乗り入れ授業の目的を再確認したり、今年度の成果と課題を整理したりしているところである。 ・行事やゲストティーチャー等への協力を引き続きお願いしたい。 ・部活動の地域展開に向け、部活動指導者を紹介してほしい。	A A13 B1	・超過勤務時間を45時間以内に抑えつつ、衛生委員会で具体的な調整が行われており、働き方改革が実効的に進んでいる。 ・特色ある魅力的な学校づくりが成果を挙げつつある。 ・先生たちの健康が第一であるため、十分に留意してほしい。 ・先生があこがれの職業となるよう引き続き改善をお願いしたい。 ・PTAとしても協力していきたい。		

※目標の精選と重点化を行い、重点の項に「1」「2」「3」で表示する。

■自己評価
 4...100%以上 3...90~99%達成 2...80~89%達成 1...79%

■学校関係者評価
 A...とても適切である B...概ね適切である C...あまり適切でない D...全く適切でない (N...判定できない)